

# 石仏あれこれ

## シリーズB 石仏を考える

### BI 石仏とは

森隆一



目黒 天恩山 五百羅漢寺 羅漢堂（同寺ホームページより）

## BI. 石仏とは

ここでは、石仏写真の整理の参考とするために、仏教の歴史をざっと眺めたメモと石仏の起原と展開を調べたものに、ある程度の補足修正ができたものを投稿することにした。

このメモは、定年の3年前から1年程の間に作成したもので、臼杵石仏に関して調べているうちに、古代史のほうに興味が変わり、古代史にかかりきりになり、メモは放置したままであった。そのため、所々意味が不明な部分もある。また、場合によっては、修正は書き直すよりも面倒なことがある。とりあえずは、最低限の訂正と、不明部分の削除を行っているうちに、思いつくこともあるかもしれないので、ボチボチやっていくつもりである。

### BI.1. 石仏のいろいろ

#### セキブツ・イシボトケ

石仏の読み方は、音読みでセキブツとするのが普通であろうが、訓読みでイシボトケと振っているのもある。セキブツとイシボトケで同じと思う人と思えない人がいるかもしれない。稀にはオヂゾウサンも同じ意味で用

いられることがある。

石仏を辞書的に言えば、石で造られた仏像ということになるだろうか。より正確には、素材である石を細工して造られる仏像とでも言うべきか。仏像をホトケ様と言い換えてもほぼ同じ意味である。中国では石彫仏という用語が用いられている。石刻という用語も用いられている。日本語では石造に相当する。お寺には、石仏の外にも石を加工したものが多く設置されている。これらは総称して石造美術・石造文化財とよばれている。石畳はこれに含まれていないようだが、塔頭の門から玄関に敷かれたものの中には文化財と言ってもいいものもある。

## 仏像

‘仏像とは仏典(御経)に現れる悟りを開いた人、及び、それに近い人、更に、高僧や仏教を理解した擁護者等である’ という解説もある。しかし、ホトケサマは如来を指す言葉とするのがいいように思われる。

仏像は、如来・菩薩、諸王・諸天・童子、羅漢・祖師・高僧などに分類される。このうち、如来・菩薩は、上とは合わないが、ホトケサマと言ってもいいかもしれない。羅漢・祖師・高僧は人として説明されている。

Wikipedia から解説を引用する。

「如来」： 仏教学者の中村元によれば、タターガタとは本来、‘そのように行きし者’ ‘あのよう立派な行いをした人’ という語義であり、仏教・ジャイナ教・その他の古代インド当時の諸宗教全般で‘修行完成’つまり‘悟りを開き、真理に達した者’を意味した語であるが、如来という漢訳表現には‘人々を救うためにかくのごとく来たりし者’という後世の大乗仏教的な見解がひそんでいて、初期仏教における語義とは乖離があるという。

コトバンクから、大乗仏教では阿弥陀・阿閼・薬師・毘盧遮那・大日などの仏陀(如来ともいう)が考え出された。

「菩薩」： ボーディ・サットヴァの音写である菩提薩埵の略であり、仏教において一般的には菩提を求める衆生を意味する。仏教では、声聞や縁覚とともに、声聞と縁覚に続く修行段階を指し示す名辞として用いられた。

文殊菩薩・普賢菩薩・普賢延命菩薩・薬王菩薩(釈迦三尊)・薬上菩薩(釈迦三尊)・地蔵菩薩・虚空蔵菩薩・弥勒菩薩・観音菩薩(観世音菩薩または観自在菩薩)・聖観音・如意輪観音・十一面観音・千手観音・馬頭観音・准胝観音・不空羂索観音・白衣観音・魚籃観音・勢至菩薩・日光菩薩・月光菩薩・金剛薩埵・除蓋障菩薩・般若菩薩・転法輪菩薩・持世菩薩・毘俱胝菩薩・大随求菩薩・水月菩薩・除惡趣菩薩・上行菩薩・龍樹菩薩・法苑林菩薩・大妙相菩薩・馬鳴菩薩・常不輕菩薩・大権修利菩薩・跋陀婆羅菩薩 (妙見菩薩は天部に分類)

六地藏・五大虚空蔵菩薩・六観音・三十三観音・四菩薩・五大菩薩・五秘密菩薩・  
八大菩薩

「明王」：一般に、密教における最高仏尊大日如来の命を受け、仏教に未だ帰依しない民衆を帰依させようとする役割を担った仏尊を指す。この尊格は強剛難化な衆生を教えに導く役割を負っているため教令身あるいは教令輪身という名で呼ばれる。或いは全ての明王は、大日如来が仏教に帰依しない強情な民衆を力づくでも帰依させる為、自ら変化した仏であるとも伝えられる。そのため、仏の教えに従順でない者たちに対して恐ろしげな姿形を現して調伏し、また教化する仏として存在している。

明王には女性(妃)尊もある。これを明妃(vidyā-rājñī)といい、チベット仏教では、男女の抱擁している尊像が多く散見される。

五大明王：不動明王・降三世明王・軍荼利明王・大威徳明王・金剛夜叉明王

八大明王：上に烏枢沙摩明王・無能勝明王・馬頭明王

愛染明王・孔雀明王・大元帥明王・大輪明王・歩擲明王・大可畏明王・六字明王・

青面金剛

「諸天」：天部(deva, devatā)は、仏教において天界に住む者の総称。天、諸天部、天部神ともいう。インドの古来の神が仏教に取り入れられて護法神となったものである。

梵天・帝釈天

四天王：持国天・増長天・広目天・多聞天

兜跋毘沙門天・大自在天・弁才天・吉祥天・韋馱天・鳩摩羅天・・摩利支天・歡喜天・  
那羅延天・鬼子母神・荼吉尼天・金剛力士・地天・伊舍那天・黒闇天・羅刹天・他化  
自在天

八部衆：天衆・龍衆・夜叉衆・乾闥婆衆・阿修羅衆・迦楼羅衆・緊那羅衆・摩睺羅伽  
衆

妙見菩薩・飛天・技芸天・焰摩天(閻魔)・深沙大将・寿老人・福祿寿・布袋・恵比寿・  
閔帝菩薩・伽藍菩薩

八大龍王・十二神将・二十八部衆・不動八大童子・十二天

「阿羅漢」：阿羅漢とは、サンスクリット語 arhat に由来し、仏教において最高の  
悟りを得た、尊敬や施しを受けるに相応しい聖者のこと。この境地に達すると迷いの  
輪廻から脱して涅槃に至ることができるという。略称して羅漢ともいう。

十六羅漢：賓度羅跋囉惰闍・迦諾迦伐蹉・蘇頻陀・諾距羅・跋陀羅・迦理迦・  
伐闍羅弗多羅・戍博迦・半託迦・囉怛羅・那迦犀那・因揭陀・伐那婆斯・  
阿氏多・注荼半託迦

十八羅漢：上に大迦葉・軍徒鉢歎の2人か又は慶友・賓頭盧の2人を追加

五百羅漢：仏陀に常に付き添った500人の弟子、または仏滅後の第1回の結集に集  
まった弟子を五百羅漢と称して尊崇・敬愛することも盛んにおこなわれてきた。

(仏像)儀軌には概ね諸天までの主要な仕様が記載されている(国会図書館  
> [「仏像図解：儀軌之巻」](#) 芸術書院出版部、大正14年)。

最後に挙げられている祖師・高僧で代表的なものは弘法大師(弘法さん)である。羅漢は単体で祭られることは殆どなく、十六羅漢・五百羅漢として祭られている。五百羅漢の本来の意味は第1回仏典結集に参加した500人の高僧を指すということであるが、著名な羅漢以外はそうでないものも多いということである。五百に満たないものもあれば、五百を超えるものもあるようである。なお、第2回は700人、第3回は1000人であるが、ウソ八百と思われるのか、七百羅漢・千羅漢はないようである。主要な羅漢はキチンと造るが、他は寄進に頼ることもあったとされている。僧形で、顔は自分に似せたものを寄進した例があることを読んだ記憶がある。

変わったものとしては、断酒の願をかけ、酒樽の上に封印する意味で自分の像を置いた石像を寄進した例もある。(秩父:金昌寺)

## 石仏の形態

石仏は、形態からは、丸彫り・レリーフ(浮き彫り(陽刻)・蔭彫り(陰刻))に分けられる。浮彫は厚・中・薄に細分されている。丸彫りの中には、光背付き厚浮彫りとも言うべきものが圧倒的に多い。

立ち居からは、立像・坐像・半跏像などの区別もなされている。

設置場所は、石窟、磨崖(半石窟)、寺院(主尊、境内、墓地)、路傍などが挙げられる。

これも日本独自と思われるが、札所仏(33 観音・100 観音・四国 88 ヶ所)も各地に造られている。

文献に書かれている石仏のリストを作成することを思いついた。寺名などの名称・所在地・主な石仏などを書き込んだものである。

ここで、像種・形態・立ち居・設置場所・石材などのデータの符号化を考えた。例えば、像種では

A: 仏の数、B: 如来、C: 菩薩、D: 天・王、

E: 僧・羅漢と 2 桁の数で細分

というようなことを考え、1つ2つで試してみたが、すぐに、これは実行不可能であることがわかった。それは、上記符号化を行うための知識が無いことであり、それを身に着けるための時間を考えると諦めざるを得なか

った。サンスクリット語の呼び名のアルファベット表記の頭文字など意味のある記号を用いるなどの改良も考えたが、これも同様に断念し、漢字をそのまま用いることにした。

これを LaTeX の tabular 環境で作成したが、後に Excel にデータを移動した。次図は AI 章で扱った知恩寺のものである。

名称(A):	智恩寺
通称など(B):	
所在(E):	京都市左京区田中門前町
訪問(G):	3
評価(I):	○
地図1(J):	吉田山31
地図2MGN(K):	
データ1(M):	(墓地に)6地藏、阿弥陀、五劫思惟阿弥陀3基
データ2(Q):	了蓮寺(書院裏)に阿弥陀板碑
データ3(Q):	
文献1(S):	「京都の石仏」、「京の石仏」

図 BI.1. 石仏リスト例

## BI.2. 石仏以外の石造物

お寺や神社には石仏以外の石造品が多数配置されている。

また、関東に多く見られる庚申塔や、長野県に多い道祖神、主として鹿児島県に見られる田の神さあも石仏に入れられることがある。これらは、石神と呼び、石仏と区別する人もいる。印象としては、庚申塔は塔よりは碑に近いものと思っている。これらは路傍に置かれているものが多い。

石仏と言えるかどうか人によって異なるだろうが、筆者としては、仏教に由来するものを石仏とよびたい。

Wikipedia「庚申塔」

庚申塔は、庚申塚ともいい、中国より伝来した道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔のこと。庚申講を3年18回続けた記念に建立されることが多い。塚の上に石塔を建てることから庚申塚、塔の建立に際して供養を伴ったことから庚申供養塔とも呼ばれる。

庚申講（庚申待ち）とは、人間の体内にいるという三尸虫という虫が、庚申の日の夜寝ている間に天帝にその人間の悪事を報告しに行くと言われていたことから、それを避けるためとして庚申の日の夜は夜通し眠らないで天帝や猿田彦や青面金剛を祀り、勤行をしたり宴会をしたりする風習である。

## Wikipedia「道祖神」

道祖神は、路傍の神である。集落の境や村の中心、村内と村外の境界や道の辻、三叉路などに主に石碑や石像の形態で祀られる神で、村の守り神、子孫繁栄、近世では旅や交通安全の神として信仰されている。

厄災の侵入防止や子孫繁栄等を祈願するために村の守り神として主に道の辻に祀られている民間信仰の石仏であると考えられており、自然石・五輪塔もしくは石碑・石像等の形状である。中国では紀元前から祀られていた道の神「道祖」と、日本古来の邪悪をさえぎる「みちの神」が融合したものといわれる。全国的に広い分布をしているが、出雲神話の故郷である島根県には少ない。甲信越地方や関東地方に多く、中世まで遡り本小松石の産業が盛んな神奈川県真鶴町や、とりわけ道祖神が多いとされる長野県安曇野市では、文字碑と双体像に大別され、庚申塔・二十三夜塔とともに祀られている場合が多い。

山上の自然石を神体としている神社がある大きな自然石の上に頭部を載せたものもある(万治の石仏)。また、名前を表す梵字を | 字刻んだ梵字仏も石仏に入れている人もいる。

## 石塔・石燈籠

他に石仏とは言いにくいものとして、できないものとしては、石塔、石燈籠等がある。

石塔には、基壇(一層)に四方仏の浮彫があることがある。韓国の古寺には、石塔と石仏が法隆寺の塔と金堂の様に、寺のメインなものとしてされている。歴史的には、仏像よりも仏塔のほうが先に現れた。

また、釈迦の替わりとして、仏足石もある。

一番広い解釈(定義)は石で造られた手を合わせたくなる(信仰の対象となる)ものであろうか。

Wikipedia「仏塔」によれば、仏塔(ストゥーパ)は仏舎利を納めた塚である。そのせいか、ストゥーパの写真を見ていると円墳を連想してしまう。

奈良の頭塔も同様と考える。石仏が段を成していることから、ストゥーパを念頭においていた可能性もある。

日本では、墓標仏とそれ以外の区別も考えられる。数としては、前者が圧倒的に多いと思われる。

## 墓標仏

墓標仏は光背付き石仏に名前・戒名等を刻んだものであり、仏は地藏・聖観音・如意輪観音がベスト3である。希に丸彫りもある。

石仏散歩 > [「81 無縁塔がある風景」](#)

石仏としては、墓標仏が圧倒的に多い。宝篋印塔や僧侶の墓として用いられている五輪塔のほうがふさわしい気がする。

遺体や遺骨の上に石造の墓標をおくのは世界に共通しているように思われる。

墓標には石塔石仏が用いられてきた。近代には正方柱の上部が弧を描いている吉相型に「々々家先祖代々之墓」のような文字を刻んだものが用いられるようになった。

金光泰観墓相研究所 > [「お墓の歴史」](#)

時間の経過とともに無縁仏が増えていくのは避けられない。無縁墓標石仏・石塔を集めた寺として、滋賀・石塔寺と京都・あだしの念仏寺が有名である。

一乗谷の石仏では、同じような石仏が数多く見られる。これを墓標石仏とはないかと考えている。

札所観音も、大きさが異なるだけで、殆どがこの光背付き石仏である。墓標仏でも大きいものもあることから、違いは名前・戒名等があるかないかである。この形態の石仏は丸彫りと言えないことは無いが、丸彫り石仏というのは少し抵抗を感じる。気分的には、光背付き厚浮彫りと考える。この利点としては、首が折れることを殆ど考慮する必要がないことであろうか。首切り地蔵は首のない地蔵である。人為的に首を折られたこともあるであろうが、風雨にさらされている間に首の部分が弱くなり、ほぼ自然に折れることも考えられる。生物的に見ても、頭と胴体が首という他所い部分でつながっているのは人間だけである。(キリンの首はかなり太い。)

この光背付きの光背は、磨崖石仏の磨崖を象徴しているのではないかと想ったことがあるが、これは無理のような気がする。

インドでも見られる。中国は舟形光背よりは、丸いものが多い。

路傍のお地蔵様(石仏)は京都の地蔵盆の地蔵のように、意図をもって路傍におかれたものもあるが、無縁仏もかなりあるのではないか。農家では、自宅の近くに家族の墓を造るのが昔は普通であったようである。家が放棄され、墓地が残った可能性もある。また、これが水害等で流されて埋まり、後に発見されその場に祭ったもことも考えられる。石仏の由来として、仏様が夢に現れそのお告げに従って掘ったら、石仏が現れたという話もある。

路傍の石仏として、簡単な持ち運びできるものが、長年にわたって守ら

れているのは、世界的に見た場合希有なことではないか。日本を除いて、路傍の石仏は知られていない。‘そんなものが道端に残っているのは日本だけ’ということを読んだ気もする。

## あとがき

殆どメモである。メモのきっかけを振り返ってみる。

石仏の写真を撮っているとき、その名前が気になったことがある。特に、  
‘ホトケサマの集団’ 五智如来・33 観音・16(18)羅漢などを写しているときには、名前の他にも由来なども気になっていた。諸仏のリストは、文章よりも、メモ風のほうがわかり易いと考えた。諸仏の由来は興味あるが、数も多く、Wikipedia の記事の抜粋引用しか出来ないのもので、必要ならば、各写真のところで引用することにする。

儀軌という用語を改めてみた。例によって Web で調べてみた。

「仏像を訪ねて」、仏典刊行振興会・南日義妙 4 刷、1979、文真堂  
では、儀軌の各仏像に関する記事に加えて、図や他のデータが加えられている。

コトバンク「儀軌」日本大百科全書(ニッポニカ)「儀軌」の解説

法則、規則の意。サンスクリット語のカルパ、ビディ、タントラの訳。秘密儀軌ともいう。古代インドの諸神礼拝の規定、儀式の執行規定を称したが、さらには密教の儀礼の発達につれて諸尊の造像、供養、呪文の読誦などの修法次第を記したものを儀軌という。一般に、教理の記述である経典(スートラ)に対して儀軌と称するが、密教

では両者の区別は明確ではない。密教の修法次第によって、諸尊の内証本誓(心のうちの悟りや本来の誓願)が異なるため、儀軌の種類が多く、相違点もある。現存の儀軌にはインド撰述のものと中国撰述のものがある。また、別に密教の経典と儀軌の理解や修法上の便宜のため弟子に伝授する師の口伝が、次第、法などと名づけられて数多く編集された。それらは聖教とよばれる。[小野塚幾澄]

サンスクリット語を持ち出すならば、サンスクリット語の意味(訳)も書いてほしいと思う。仏教用語の殆どはサンスクリット語起源と思われる。禅宗は少し異なるかもしれない。さらに、漢字用語の多くはサンスクリット語を(当時の)中国語の発音で模したものと思われる。日本に伝わったのは表意文字で書かれた漢字の経典である。